

論文審査の結果の要旨

論文題目： 進化論から地政学へ——近代日本における国際政治学の形成

論文提出者： 春名 展生

提出論文は、加藤弘之、有賀長雄、建部遯吾、小野塚喜平次、神川彦松の五人の学者を取りあげながら、進化論から地政学への移行という観点から、近代日本における国際政治学の形成の一側面を論じたものである。これまでの研究では、国際政治学は第一次大戦の反省から成立したという理解に基づき学説史が描かれてきた。これに対して、提出論文は、世紀転換期の知的世界を席卷した進化論が国際政治論に与えた影響を手掛かりに、第一次大戦前の議論がその後の国際政治学にどのように継承されたかを精査することで、近代日本の国際政治学史を再検証している。

序章「国際政治学と進化論」では、国際政治学の起源を第一次大戦後ではなく、進化論の枠組で国際政治論が扱われていたそれ以前の時期に求める視角が提示され、マルサス人口論に対する評価を軸に、スペンサーの系譜とダーウィンの系譜に進化論が分節化される。そして人口・資源をめぐる言説として進化論の国際政治学への影響を検討することで、思想史と政治史に知見を齎す可能性を示唆する。

第一章「「宇内統一国」か「生存競争の修羅場」か」は、進化論の受容をめぐる必ず言及される加藤弘之の思想を扱っている。加藤が進化論を掲げて天賦人權説を批判したのはよく知られているが、他方、加藤が同じく優勝劣敗の論理に依拠しながら宇内統一国の展望を抱いていたことはこれまで等閑視されてきた。本章はこの希望的観測をめぐる加藤が見せた動揺をダーウィン学説に対する逡巡を中心に分析しながら、過剰人口論の台頭を前に加藤の宇内統一国論が後退していく過程を描いている。

第二章「「門戸開放」か「殖民政策」か」は、有賀長雄に焦点を当てて、スペンサー進化論からダーウィン進化論へ時代思潮が移行していくなかで、有賀が示した抵抗を論じている。従来の有賀研究は、初期のスペンサーの社会進化論に依拠した社会学的関心と、社会学から離れて国際関係の講究に移行したそれ以降の時期を峻別してきたが、本章ではその双方の時期を貫く有賀へのスペンサーの影響を検討しながら、ダーウィン進化論に依拠した七博士の日露開戦論に抗った有賀の軌跡を描いている。

第三章「資源への目覚め」は、社会学者建部遯語と日本社会学院に集まった人々の群像を描いている。建部はダーウィン進化論の影響を最も強く受けた社会学者であり、過剰人口問題への対策として食糧・資源政策を重視した人物であった。建部の教え子には、後の資源局長官となる松井春生がおり、建部の創立した日本社会学院には近衛文麿が名を連ねていた。

次章で扱われる小野塚喜平次もまた日本社会学院会員であった。

第四章「人口・資源・土地と「衆民主義」」は、通常、「衆民主義」の主唱者であり吉野作造の恩師として描かれる小野塚喜平次の政治学が当初は進化論的な枠組から出発しており、地理学者ラッツェルの影響を受けた領土に関する政治学的考察を展開していたことを検証し、小野塚の配下には地政学に傾倒する者が少なくなかったことを指摘する。小野塚自身は、国家間の生存競争に身を投じる危険性も早くから感じており、第一次大戦後小野塚が東京大学法学部内に国際政治学講座を設立した遠因はここにあったが、他方小野塚門下からは、次章で扱う神川彦松のように地政学的な国際政治学を展開する人物も現れた。

第五章「国際政治学と地政学」は、その神川彦松の戦前・戦中・戦後の軌跡を追いながら、進化論から地政学へという系譜の終着点として神川を論じている。一九二〇年代の神川は、『国際連盟政策論』を刊行し国家間の連帯関係に着目する議論を展開していたが、満州事変以降その立場を地政学的国際政治学へと移していった。本章は、この神川の議論の変遷とそれを貫く基底的関心を抽出しながら、その論理構造を解明している。

終章「国際政治学の「初志」」は、これまでの議論を振り返りながら、第一次大戦後に小野塚により齎された国際政治学の「初志」と神川によるユートピア主義批判を並べて検討し、両者の相違とともに、国際的富の再分配への関心に対する両者の共通した関心を描くことで、全体の総括を行っている。

以上が提出論文の要旨であるが、提出論文は次の三つの長所を持っている。第一に、従来の国際政治学史研究が第一次大戦の衝撃という事実には捕らわれ、それ以前の時期の知的系譜を等閑視してきたのに対して、提出論文は、大戦前からの進化論の影響という視点に基づいて問題を再構成し、近代日本における「国際政治学以前の国際政治学」の態様を明らかにした。また進化論を軸にしたことにより、現在の学問的分業関係を前提にした政治学史では視野からこぼれてしまう社会学の議論が国際政治学にもった意義に対して目配りされている点も見落とせない。

第二に、従来の研究では一緒に論じられることのなかった五人の学者を一連の問題関心から分析したことで、思わぬ知的系譜関係が浮かび上がってきたことがある。加藤や有賀の理想主義的な側面を明らかにしたことや、従来は吉野の恩師として大正デモクラシーの前史のなかで扱われてきた小野塚の多面的性格を指摘したことは、これまでの研究ではあまりなかった特徴である。また人口・資源・地政学という問題圏のなかで、近衛と建部、小野塚と松井、という従来は同じ平面では扱われてこなかった人物が纏めて論じられている点は、思想史研究者のみならず政治史研究者にも刺激を与えるものである。

第三に終章で触れられているように、進化論から地政学へ向かっていった論者たちが、人口・資源という経済・社会問題に関心を持っていたが故に、国際的富の再分配という主題に彼らが敏感にならざるを得なかったことを示唆していることも興味深い。地政学はリアリズム的議論に親和性を持つが、本論文が扱う近代日本の事例では、それは単に安全保障領域にのみに関心を持つリアリズムというよりは、国際的領域における配分的正義への関心を

内包する言説であったことが示唆されている、といえるだろう。

他方、いくつかの点でいまだ少し精査が必要な点も見受けられる。進化論の国際政治学への影響という視角を導入した提出論文の独創性は評価できるが、進化論の持つ多様な性格や理論的背景についていまだ少し言及があってもよかったかもしれない。また、マルサス人口論の受容を媒介に進化論が過剰人口論を包摂していく過程は描かれているが、過剰人口論自体は必ずしも進化論を媒介とせずとも成立し得るものだったのかもしれない。提出論文で扱われた各々の時期における人口論の位相と濃淡や、進化論に依らない議論の系譜と本論文が扱っている系譜をどのように書き分けるのか、という問題は残りえるかもしれない。

しかし、仮に上記のいくつかの点で弱点があったとしても、提出論文が、従来の研究にない新たな視点を提示したことは疑いえない。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。